
論 文自然公園におけるレクリエーション行動の研究 (I)
— 大山国立公園の登山行動 —鈴木 美知子*
川 村 誠**Studies on Recreational Behaviors in the Natural Park (I)
— The Mountaineering in the National Park “Daisen” —Michiko SUZUKI*
Makoto KAWAMURA**

Summary

In the present-day life of developed countries “nature-oriented” has become a common term. The recreational use of nature areas has spread throughout natural parks. In Japan, three kinds of natural parks (national parks, quasi-national parks and prefectural natural parks) have been designated which are areas of prominent natural scenic beauty. However, these natural parks play an important role as outdoor recreation sites. A variety of different activities such as mountain climbing, walking, cycling, camping, skiing and driving are expanding in natural parks. Now, in highly visited areas, it is not easy to sustain proper conservation and utilization. But surprisingly, there are very few studies on the recreational behaviors of visitors to natural parks in Japan.

This study presents a typology of mountaineering and mountain-walking in Daisen National Park in Tottori Prefecture from the viewpoint of the analysis of recreational behavior. The study also attempts to explore the changes of such types since the time of the introduction of modern mountaineering to Japan.

This study takes three approaches to data collection :

* 鳥取大学農学部 農学研究科 農林環境科学専攻
Master's Program of Environmental Science, Graduate School of Agriculture, Tottori University

** 鳥取大学農学部 農林総合科学科 生存環境科学講座
Department of Environmental Science, Faculty of Agriculture, Tottori University

- (1) Creation of a data-base of historical documents consisting of excerpts from newspapers since 1912.
- (2) Collect on of existing statistics on mountaineering visitors.
- (3) Use of a questionnaire, based on interviews with visitors at the mountain top.

Seven different types of mountaineering behavior were discovered. There were ① picnic type, ② alpensports type, ③ collective type, ④ drilling type, ⑤ exploration type, ⑥ investigation type and ⑦ event for the prevention of distress. The visitors were grouped into types according to the characteristics of their behavior. In addition on the historical changes of recreational types were illustrated. Finally, the paper discusses the correlation between behavior and consciousness of visitors in the present by the use of the method of multivariate statistical analysis.

I 研究の課題と方法

1. 研究の課題

現在、人々の自然を求める志向は都市部の生活者を中心に多様な形で拡大している。¹⁵⁾ 自然公園の利用者もこの社会ニーズの高まりと交通アクセスの改善の中で年々増加してきた。環境庁の推定によれば1991年における自然公園の延利用者数は10億人の大台をはじめて超え、10億1,400万人に達した。⁶⁾ しかし、日本の自然公園の場合、1920年代の制度化の当初から既に利用と保護のせめぎあいの中にあり、現在においても過剰利用と自然保全の問題が繰り返し話題にされている。^{16,19,20)} ただし、自然公園における利用実態について、公園内の利用行動に踏み込んで具体的に調査研究したものは意外に少ない。^{1,24)}

その理由として、研究を進める立場から言えば、自然公園における調査の難しさを指摘できる。一つに自然公園への交通アクセスは多方面から可能であり、利用地域も多岐にわたって、調査ポイントの選定が難しい。また他に、公園での各種利用形態のそれぞれに季節性が強く、加えて利用のピークは好天時に集中するため、適時の調査が困難である。総じて、限られたスタッフと費用でより有効な調査を行うには、調査対象となる自然公園の特性に即した臨機応変の調査実行が必要である。

そのため、本研究では、大山隠岐国立公園の大山地区（以下、大山）を事例に、利用形態の異なるレクリエーション種目のそれぞれに対し、現地において利用のピーク時に訪問者へのインタビュー方式のアンケート調査を実施した。

本報告では、登山行動を取り上げる。言うまでもなく、山岳地域の自然公園の歴史の中で登山行動は代表的な利用形態であり、その登山行動の変遷の中からスキー、キャンプをはじめ各種の利用形態を分化させてきた。その点、国立公園大山も例外ではなく、登山行動から分析する意義は大きい。

まず、第1に資料が現存し、分析が可能な大正期以後を中心に、大山における登山行動の変遷

と行動パターンの分析を試みる。第2に、現代における登山行動の特性を明らかにするため上記の現地調査データから行動と意識の両面の分析を加える。

2. 大山登山前史

「大山隠岐国立公園」の範囲をみると、北は島根県の隠岐島・島根半島から南は岡山県の蒜山・三平山を含み、大山地区はその中心地域に位置する(図1)。中国地方の最高峰(標高1,711m)であり、広々とした山裾を引く雄大な姿は昔から人々の目を楽しませてきた。交通アクセスも発達して、四方から入り込み可能であり、また環状道路も伸びているので訪れやすい。そのため、ドライブ、散策、スキー、キャンプ、登山等、多様なレクリエーション形態でにぎわっている。

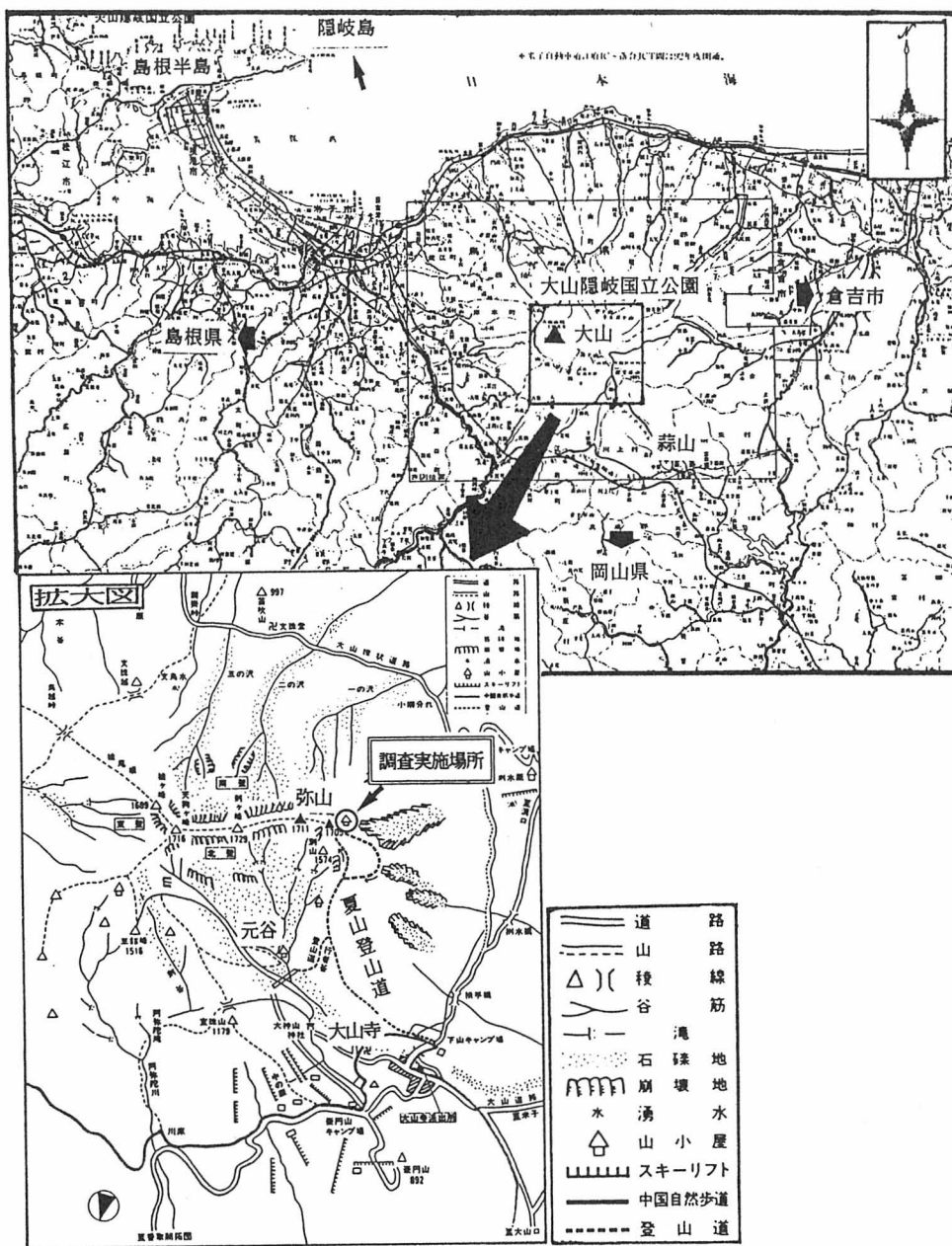


図1 調査地点

近年、大山地区への訪問人口は年間200万人以上になる。

大山の登山コースで最も利用されているのが夏山登山道である。地質・岩質は角閃安山岩系が主で、風化分解しやすい。²⁾ 植生は、夏山登山道2合目から6合目にかけてブナ林が優先している。6合目から植生は低木草本帯になる。8合目まで登ると辺りがダイセンキョラボクの純林となる。気象は、雨、曇、雪の日が多く、年間降水量は大山中腹の大山寺地域で3,472ミリになる。¹¹⁾ このような自然条件に加えて、登山道の過剰利用により表層の植物が減少し、頂上・登山道のガレ化を促進している。現在、大山頂上の崩壊問題は深刻である。

さて、大山登山の歴史は古代に遡る。最初に文献に登場するのは西暦733年、神話として「出雲国風土記」に「大神岳」という名で記載されている。¹²⁾ その後、古文献に大山の名が出ている場合、いずれも霊験所として書かれている。大山の史実については、とくに大山寺の寺日記「大山寺縁起」に詳しい。「大山寺縁起」は室町時代に作成された文書で、内容は伝説から事実まで紹介されている。縁起に記載されている大山登山の最も古い話は、「西暦683年に山林斗藪の行者が絶えずやって来る」というもので、修行という形の登山が既にこの頃からはな行なわれていたことを示している。¹⁸⁾

なお、大山への信仰登山には厳格なしきたりがあり、一般人の登山はかたく禁じられていた。宗教者の山林修行といっても地方によって流儀に違いがある。大山で定着したのは、「弥山禅定」という宗教儀式を伴った修行である。この弥山禅定は年1回の大山登山で、登るのは選ばれた修験者5人だけであった。弥山禅定は、「①山に登る、②山頂の池で一連の儀式をする、③ヨモギや池の水を薬用にとって来る」という単純なものだが、ひとつひとつの行為が神格化されている。1年に1度行われる登山（6月14日）まで修行者は節制と写経の日々を送り、当日の夜、経書と闕伽桶（あかおけ）を持って山道を進む。当時は登山道整備などなく荒れた道で、桶にしても四角い木製の大きな物であった。登頂すると経書を納め、頂上の池の水とヨモギ・ダイセンキョラボクの枝を持って下山した。ふもとに降りると病人が待ちかまえており、それぞれ身体の患部を修験者に踏んでもらい霊験にあずかろうとする。また、水や草も「霊水」「薬草」として、各寺院や信者に分け与えられた。^{4,12)} このように弥山禅定は神聖な儀式であり、大山はその聖地だったので、一般人の登山は堅く禁じられていた。「山に登った者は生きて帰らない」と言われ、当時の一般人は大山登山を非常に恐れている。現代でこそ、老若男女あらゆる人々が登るようになった大山であるが、昔から一般の人々に開かれた山ではなく、御神体として崇められ、庶民の登山が許されなかった。大山は長い間、信仰登山の歴史を経てきた。⁹⁾

修験者以外の人間がはじめて大山登山をしたのは西暦1832年のことだった。国学者岡部春平率いる5人の人間が大山登山を試みた。脱落者がひとり出たが、結局登頂して生還し、信仰登山のタブーを破った。¹³⁾ 次にタブーに挑戦したのは、探検家松浦武四郎である。ここまでは江戸時代であるが、明治維新を転機に状況は全く変わる。

明治維新の後、探検・開拓としての登山や学術調査の登山が徐々に増えていった。²⁵⁾ 1899（明治32）年には曹洞宗第十五中学校が集団登山を行ない、1903（明治36）年には山陰新聞社主催の登山大会が開かれ116人が大山登頂を果たしている。¹³⁾ その後は登山者数が増えてゆき、その勢

いに乗って大正時代を迎えた。

3. 研究の方法

(1) 大山登山行動の変遷

本研究では、まず第1に、大山登山史と登山タイプの分化を整理した。大山で起こった出来事を知る基礎資料として、大山登山史年表を作成した。大山登山に関する文章・資料等を網羅的に収集し、文献研究を行ないまとめたものである。年表には大山関連山岳団体の結成の動向も掲載した。大山における多様な山岳団体の活動は、それ自体が大山の利用行動の重要な要素である。次に、時代別に登山者の行動特性から登山タイプ区分をして、どの時期にどのような形態の登山が繁栄したかを明らかにしようとした。資料として、鳥取市内で発行されてきた日本海新聞（元「鳥取新報」）をとりあげ、1912(大正元)年からの大山登山関連記事を収集し、登山行動の主体（人物）と目的に着目して、日付ごと1件ごとに整理したデータベースを作成した。このデータにより、目的別に登山タイプを区分し、時代別に登山タイプの出現件数の統計を作成した。そして、登山タイプの出現とその推移を流れ図にして表現した。

第2に、登山者数の変化を整理した。大山登山の発展を量的にはかる手法として、登山者数の統計をとった。大山登山者数を数えた資料は現在4件残っているが、調査時期や調査主体が異なり、それぞれ調査方法及び精度が異なるので、単純に比較できない。そこで別個のデータとして整理して考察した。

第3に、遭難事故の推移を整理した。登山行動の変遷の一側面として、遭難事故の推移を追った。現在、米子警察署に保管されている大山遭難者カードには、1952年から92年までの大山遭難事故の記録が残っている。事故記録中、遭難件数及び遭難者の被害の程度を聞き取った。その資料を整理して、①遭難件数年別推移、②遭難被害別年別推移、③遭難者月別累積数のデータを作成した。

第4に、1982年登山者アンケート調査の結果を整理した。登山者行動をより綿密に調査する手段としてアンケート調査があるが、過去において1回だけアンケート調査が行なわれていた。1982年に自然保護・利用研究会が実施した夏山登山者アンケート調査である。¹⁷⁾ この調査結果を再整理して、現代登山の現状について検討した。

(2) 現代登山の行動分析

現代の大山登山者の行動を探るために、大山頂上でアンケート調査を行なった。大山登山者は、年間約10万人になるといわれている。限られた時間と調査員を使って10万人の登山者行動を調べるのは困難である。そこで、効率良くデータが得られ、かつデータ精度の高い現地アンケート調査を実施することにした。調査日は登山者数が多くなると予測される日を選び、また調査地点は登山者が回答しやすいと考えられる大山頂上避難小屋に設定した。

II 登山行動の変遷

1. 登山タイプ区分及び登山タイプの変遷

(1) 登山年表の作成と登山タイプ区分

大山登山関連の出来事を知るために、大山登山史年表を作成した(表1)。作成にあたっては、大山登山の性格の変遷に注目し、既存の文献を参照した。^{3,7,8,9,13,14,18,22)}

次に、新聞記事データを整理した結果、登山タイプが7つに区分された。『探検登山』、『調査登山』、『錬成登山』、『行楽登山』、『団体登山』、『アルペンスポーツ登山』、『遭難防止登山』である(表2)。

表2 登山タイプと記事内容(目的による分類)

登山タイプ	記事の内容(人物→目的)
探 険 登 山	先駆者→探検, 開拓/登山家→ルート開拓
調 査 登 山	学者→学術調査/行政官→視察
錬 成 登 山	軍隊→演習/一般市民→錬成
行 楽 登 山	一般市民→行楽
団 体 登 山	各団体→登山大会, 竣工式, 祭/皇室→登山/学生→学校行事
アルペンスポーツ登山	登山家→雪山登山, ロッククライミング
遭 難 防 止 登 山	遭難防止協会, 山岳団体→山岳パトロール, 救助訓練, 登山道・道標整備

7つのタイプを順番に説明すると、『探検登山』は、パイオニアと称される探検家や登山家によって、今まで登られていなかったコースやルートが開拓される登山記事を対象とした。『調査登山』は、学者が地質、植物及び動物などの調査に来る登山記事、および行政官が自然公園の視察に訪れる登山記事を対象とした。『錬成登山』は、主に戦時中、陸軍が兵役訓練として歩く登山記事、さらに、戦争で残された婦人、子供及び負傷して戦地から帰ってきた兵士が体力増強として登る記事を対象とした。『行楽登山』は、一般市民が「行楽」として登る記事を対象とした。また、新聞記事内に「行楽」以外の表現で、「観光」「ハイキング」など「行楽」の要素を含む記載がある場合も行楽登山タイプとした。ただし、何かの行事やイベントで登る登山記事は団体登山に含めた。『団体登山』は、「登山大会」、「山開き祭」、「探鳥会」などイベントの際に団体で登る記事、学生が学校行事で登る記事、皇室関係者の登山時に団体で登る記事などを対象とした。『アルペンスポーツ登山』は、主に登山家、山岳会の雪山登山及びロッククライミングに関する記事を対象とした。『遭難防止登山』は、地元の青年団・遭難防止協会などが事故を未然に防ぐため登山道整備をする記事、警察や遭難防止協会が遭難事故の時救助する記事、あるいは、遭難救助訓練のための登山記事を対象とした。

さて、登山タイプの出現件数を時期別に分けると、大正時代、昭和時代Ⅰ(戦前)・昭和時代Ⅱ(戦時中)、昭和時代Ⅲ(戦後)、昭和時代Ⅳ(高度経済成長期)、昭和時代Ⅴの6つの時代を区分することができる(表3)。

表3 大山登山関連記事の出現件数

登山タイプ	大正時代	昭和時代Ⅰ (戦前)	昭和時代Ⅱ (戦中)	昭和時代Ⅲ (戦後)	昭和時代Ⅳ	昭和時代Ⅴ
	1912~ 1926年	1927~ 1936年	1937~ 1945年	1946~ 1955年	1956~ 1965年	1966~ 1975年
探 険 登 山	2	3		2	2	
調 査 登 山	3	5	1	2		2
錬 成 登 山	1		17			
行 楽 登 山	3	11(2)	10	44(5)	90(26)	64(13)
団 体 登 山	14	14	3	10	16(4)	35(1)
アルペンスポーツ登山		2(1)	3(1)	7(3)	23(20)	24(20)
遭 難 防 止 登 山	1			2	15	17
計	24	35(3)	34(1)	67(8)	146(50)	142(34)

注 ()内の数字は、遭難事故を取り扱った記事の件数である。

表3に整理した各時代の特徴と大山登山史年表(表1)の両者を関連付けて、登山タイプの変遷を整理し、図化した(図2)。以下、表1~3および図2でまとめた各時代の特徴を、新聞の記事内容と照らし合わせて説明したい。

(2) 大山登山の変遷と登山タイプの出現件数

1) 大正時代(1912~26年)

大正時代は『団体登山』が盛んであった。例えば、新聞記事の見出しを見ると、「鳥取中学校の登山」(1914年9月17日以下年、月、日の文字省略)、「米子女学生の登山」(1917・8・1)、「青年団の登山」(1919・8・14)とあり、学校登山を中心に団体登山利用が多かった。

1921(大正10)年、大山は国立公園の候補地になり非常に注目をあびた。大登山大会が開催され、1日当りにして大正期最高の登山人数と言われた1千人が大山頂上にあがった(1921・7・16)。また、避難施設として頂上近くに石室を竣工し、盛大な祝賀式が開かれた(1921・7・26)。さらに、8月には大山保勝会(大山国立公園協会の前身)が組織され(1921・8・18)、その翌年の6月から国立公園候補地として本格的な実地調査が始まった(1922・6・15)。

このように、大正期は、団体による登山利用が盛んであり、かつ、1921年国立公園候補地になることで、登山需要が高まった時期である。これを「第1次登山ブーム」とする。

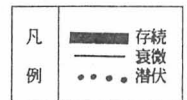
2) 昭和時代Ⅰ(1927~36年)

昭和時代Ⅰは、『団体登山』に加えて、一般市民による『行楽登山』が盛んとなった。『団体登山』の様子を著した記事は、「鳥取高女の大山登山」(1932・7・6)という高校生登山の他に、登山の安全を祈る山開き祭登山の記事(1928・7・18)、皇室関係者の登山時のにぎわいを書いた記事(1933・8・18)、登山の速さを競う走破競争の記事(1934・7・27)などバラエティーに富んでいる。また、『行楽登山』は昭和時代に入ってから急増している。登山者向けに定期自動車を運行するようになったので(1929・5・19)、日帰り登山が可能になった(1931・8・21)。7月の登山者数が1万人を越えて(1933・8・6)、女性の登山者も増えていった(1933・8・5)。「健康美を発散すべく三朝芸子

表1 大山登山の歴史

和暦	西暦	結成された山岳会	出来事	大山登山の変遷(流れ図)	
天武12	683		山林斗戯の行者が絶えずやって来る(大山寺縁起) 当山に役優婆塞がやってきて修行する(大山寺縁起)		
弘仁9	818		弥山禪定はじまる		
長久4	1043		明運法師、伯耆大山一夏精進(法華験記)		
嘉応1	1169		聖の靈験所として大山あり(梁塵秘抄)		
建保1	1213		宇治拾遺物語の中に「山伏船折りかえすの事」大山あり		
元弘3	1333		後醍醐天皇船上山に隠れる		
文化11	1814		修験者野田泉光院大山に登る(日本九峰修行日記)		
天保3	1832		国学者岡部春平登山に挑む(大神山詣記)		
天保7	1836		探検家松浦武四郎大山に登る		
弘化3	1846		僧塔然の書いた「大山雜記」に弥山禪定の説明有り		
明治1	1868		神仏分離令布告される	(弥山禪定の廃止)	
明治22	1889		植物学者堀正太郎大山に登り学術調査を行う		
明治26	1893		新聞記者織部永太郎大山に登り記事とする		
明治32	1899		曹洞宗第十五中学校集団登山を行う		
明治34	1901	大山登山会	作家大月桂月大山登山を行う		
明治36	1903		歴史学者沼田頼輔度々大山登山する		
明治39	1906		山陰新聞社主催大山登山会120人の盛況		
明治39	1906		毎日新聞社大山山頂でキャンプを行う		
大正3	1914		志賀直哉大山登山する、この頃より登山大会等頻りに開催		
大正7	1921		日本陸軍鳥取連隊冬山を登頂する		
大正10	1921		登山石室登山道石室完成記念会1400人の登山者 大山が国立公園の候補地となる 大山の調査、国立公園の計画		(国立公園候補になる)
大正11	1922				
大正12	1923	六高山岳会			
大正13	1924	明道山岳会			
昭和3	1928	岡山スキー山岳クラブ	この頃より行楽登山が増える		
昭和5	1930	後藤工場山岳部	六高山岳部スキー登山で初登頂		
昭和6	1931	下関山岳会	大山国立公園協会発足		
昭和7	1932	松江中学校山岳部			
昭和8	1933	草嶋社山岳会	大山の登山者 1年に20万人、7月は1万人以上		
昭和8	1933		鳥ヶ山遊覧常志が登攀。下関山岳会別山岩壁登攀		
昭和9	1934		大山の登山客23288人、スキー客2775人、遊覧客50936人		
昭和9	1934		大山走破競争大会、山頂のゴミ増える		
昭和10	1935		大山国立公園指定	(国立公園に指定される)	
昭和11	1936		大山登山客年69583人、山岳会集中登山を行う		
昭和12	1937		鍛成登山増加	(戦争激化)	
昭和14	1939		大山の登山者毎日平均1千人 鍛成登山が激増	(終戦)	
昭和17	1942	日本山岳会山陰支部	大山山岳会・S-O-B山岳スキークラブ		
昭和21	1946		第一回大山山開き祭を行う		
昭和22	1947		元谷、駒島に避難小屋新設		
昭和24	1949	鳥大山岳部	ユートピア避難小屋完成		
昭和25	1950		国体登山競技が開催されバスの運行が本格的となる		
昭和26	1951		グレイシャー純林特別天然記念物に指定される		
昭和27	1952	鳥大ドカー山岳会	博労座に駐車場、休憩舎、大山寺野営場完成		
昭和28	1953		樹水原の開発進む、冬山パトロール始まる		
昭和31	1956	米子山の会	観光客70万人に達す		
昭和32	1957		大山遭難発生数ピーク		
昭和34	1959				
昭和35	1960	岩友会			
昭和38	1963	伯耆山岳会	大山国立公園の区域に森山地区、隠岐島地区が編入される		
昭和40	1965		大山環状有料道路完成		
昭和41	1966	鳥取岳稜会	大山の利用客が100万人を突破する		
昭和44	1969	米鉄クラブ山岳班			
昭和45	1970	久松山岳会・岳同人	インター登山競技開催される 森山、大山のハイウェイ完成、大山の自然を守る会設立 夏の登山者約3万人、1日平均935人となる		
昭和49	1974		中国縦貫自動車道が落合まで開通		
昭和50	1975	米子カライヌスキー	観光人口215万人となる		
昭和52	1977		大山をゴミから守る県民連絡協議会結成		
昭和56	1981		夏の登山者が5万人以上になる(表5)		
昭和57	1982		環境庁大山登山者アンケートを行う		
昭和60	1985		大山の頂上を保護する会設立、登山者数減少傾向に		
昭和62	1987		リゾート法の制定、春山登山増加傾向に		
平成4	1992		大山登山者アンケート実施		(オイルショック)

図2 大山登山の変遷(流れ図)



大山登山(1935・10・23)という記事は、大山登山が簡便になり、幅広い層に浸透したことを象徴している。

この頃、同時に『アルペンスポーツ登山』が始まった。『アルペンスポーツ登山』の主な担い手は山岳会のメンバーであり、精力的に雪山登山が行われていった。この新興ぶりを示すように1927年から36年にかけての10年間、6つの新しい山岳会が結成された(前掲表1)。

1921(大正10)~36(昭和11)年の15年間は、大山の国立公園としての適性が試された時期であり、

たびたび調査が行なわれた。そのため、『調査登山』の記事数が5件ある。国立公園に指定されることは大変名誉なこととされ、地元の人達による官民一致の猛運動が展開された(1931・10・10)。登山経路を活動写真にして紹介したり(1928・7・21)、政府の調査員を籠にかついで縦走したり(1931・9・4)、雪山登山の新ルートを開拓したり(1932・2・6)、非常に積極的な態度であったことがわかる。

やがて、1936(昭和11)年、大山は国立公園に指定された。その年の登山者数の記録が残されている。当時の国立公園管理官の米川氏の調査によれば、年間の登山者数は6万9千人に達した。大正10年から昭和11年までの国立公園制定を背景とする登山の伸びを「第2次登山ブーム」とする。

3) 昭和時代Ⅱ(1937～45年)

昭和時代Ⅱは、戦時中だったことから『錬成登山』が最も多かった。「松江連隊、蒜山を縦走し大山踏破の壮挙敢行」という兵役訓練の記事(1937・2・10)、「大山国立公園登山者激増す、出征軍人長久祈願のため」という戦勝を祈った登山の記事(1938・5・25)、「大山の錬成会盛況松江市内女子商店従業員」という婦女子の錬成登山の記事(1943・5・17)など、戦争に直結した登山が多かった。

『行楽登山』記事もあるが、その全てが1937年から39年に書かれており、40年以降の登山記事内容は『錬成登山』のみである。「一切の娯楽をやめ遠足、登山を行う 興亜奉公日の一周年記念」(1940・8・30)という記事から、戦争が激しくなるにつれ、登山は娯楽として社会的に許されなくなったことがわかる。

ただし、戦時中大山町に在住していた人からの聞き取りによれば、同じ登山でも娯楽として登ると非国民扱いされるため、登山好きの人は消防士や兵隊の格好に変装して登山を続けたということである。

4) 昭和時代Ⅲ(1946～55年)

昭和時代Ⅲは、戦時下に抑えられていた『行楽登山』が復活している。終戦の翌年の夏の「にぎわう夏の大山七月中山の家に千二百名」(1946・8・10)という記事から始まり、「大山多い日は五千人、押しかける登山者」(1950・8・6)、「大山へどっと一万、もみじ客戦後最大のにぎわい」(1952・11・3)など、毎年大山は『行楽登山』でにぎわっていた。「新緑の大山へどっと、四国・九州から繰り込む」(1955・5・9)という記事で、他県から登山客が来ていることがわかる。

また、この時期はイベントが次々と催され、県民体育大会(1950・9・16)、大山国体(1951・10・28)、国際セミナー(1955・7・24)などの際には、百～千人単位の『団体登山』が行なわれた。

5) 昭和時代Ⅳ(1956～65年)

昭和時代Ⅳ(1956～65年)は、大山の主要な登山タイプがほとんど出揃い、とりわけ『行楽登山』が非常に盛んになった時期である。

まず、特徴的であるのは、『行楽登山』の記事が10年間で90件も書かれたことだ。「ごった返す大山銀座、二千五百人が連日」(1956・7・23)という記事から始まり、「沸き返るゴールデンウィーク大山も時ならぬにぎわい」(1957・4・30)、「行列続く登山路、大山七千人の人出でごった返す」

(1959・7・27)などの記事に続く。記事数及び記事内容を見ると大山登山は戦後最高のブームとなり、連日にぎわった。登山者の特徴を見ると、「旅館は予約でぎっしり」(1956・7・23)、「目立つ女性・初心者の登山」(1958・7・21)、「大山にぎわう、登山にキャンプに」(1963・7・15)「縦走路に人波続く、大山高原ラインドライブ組も」(1964・7・6)などの記事があり、ピーク時の登山者は女性・初心者の姿が目立つこと、ふもとの旅館・キャンプの利用が高いこと、ドライブを兼ねた登山客が存在することがわかる。しかし、『行楽登山』の記事90件の内26件は遭難事故の記事であった。「落石にあいケガ、カミナリ登山の高校生」(1964・8・17)、「大山で小学生転落ケガ、石につまづき20メートル」(1965・8・17)などの記事があり、登山に不慣れた登山者の記事が多い。

『行楽登山』に並ぶこの時代の特徴は『アルペンスポーツ登山』が倍増したことだ。しかも、23件の記事がある内20件が遭難関連記事であった。

次いで、『アルペンスポーツ登山』の増加及び遭難事故の増加に伴い発展したものが『遭難防止登山』である。ここで『遭難防止登山』とは、登山道整備、山岳パトロール及び遭難救助訓練を記載した記事を指している。この山岳パトロールというのは、訓練を積んだ遭難防止協会の登山家が主要な登山コースを見回り、毎年のように発生する遭難事故を防止する目的で始められた活動である。新聞記事に記載されたのは1956年12月7日の記事が最初で、1956年以降は毎冬活動が新聞記事に取り上げられた。この時期『遭難防止登山』の記事数は15件にのぼった。

昭和時代Ⅲ、Ⅳ(1946～65年)にかけての『行楽登山』、『アルペンスポーツ登山』の盛り上がりを「第3次登山ブーム」とする。

6) 昭和時代Ⅴ(1966～75年)

昭和時代Ⅴは、『団体登山』の記事数が増加し、『行楽登山』の記事が減少した。また、『アルペンスポーツ登山』、『遭難防止登山』の記事数は昭和時代Ⅳ(1956～65年)とほぼ同数であった。とくに、『団体登山』の記事で多いものは、毎年6月に催される「大山山開き祭」の記事(1966・6・6,他8件)と、毎春・秋に催される「探鳥会」の記事(1966・10・25,他15件)である。その他にも、「全国高校登山大会」(1968・8・18)、「大山一斉清掃」(1970・10・28)などの『団体登山』が行なわれた。

『アルペンスポーツ登山』は、記事24件中20件が遭難事故を記載しており、危険と背中合わせの登山だったことがわかる。『遭難防止登山』も17件の記事がある。この時代には、「遭難救助訓練」(1968・6・16,他4件)、「山岳パトロール」(1966・12・29,他3件)の他に、「登山講習会」(1968・2・11,他3件)という新しい試みが始まった。毎年起こる遭難事故は大きな問題となり、救助費が寄付金を上回ったために遭難防止協会が財政難に陥り(1966・9・27)、県が打開策の一つとして「登山講習会」を始めたのであった(1967・12・24)。

また、遭難問題の他に、「ゴミの増加」、「山頂付近の植生の減少」など、登山利用に伴う問題が浮き彫りになった。穴埋め方式で処理していたゴミが一杯になり(1969・8・12)、高山植物が踏まれる・持ち帰られる等の被害にあい(1969・9・2)、ゴミ処理がボランティアの力だけで維持できなくなった(1972・5・31)。

そして、『行楽登山』の記事数が減っているのは、行楽登山客の勢いが落ちたことを示して

いる。例えば、「夏の大山不振，登山者大幅減る，マイカーが影響・天候不順わざわい」（1968・8・12），「恨めしい万博・空模様，大山は今年の半分」（1970・4・30）というように，行楽登山客の少ない年が現れる。このように昭和時代Ⅴ（1966～75年）は，大山登山史の中で，登山に伴う社会問題が一気に露出した時代となった。

2. 登山者数の変化

(1) 1936年登山者数

1936年中に大山国立公園管理官米川氏が大山登山者数を調査している（日本海新聞1937・6・6）。この調査は，伯耆大山駅，大山口駅，溝口駅，日ノ丸バス及び大山正面バスの降車人員中登山服装者を数え，それに，徒歩，自転車及びハイヤーによる登山者見込概数を加え，結果を出したものである。結果を整理し直したものが表4である。

1936年の登山者総数は6万9千人である。6万9千人という人数を，調査日数の244日で割り1日当たり登山者数を計算すると285人になる。昭和初期の当時としては相当な実績であったと考えられる。

季節別に登山者数をみると，最も多いのは，夏山（7～9月）登山者数の3万4千人である。春山（4～6月）登山者数と秋山（10～11月）登山者数は，1万6千人と1万8千人で，どちらも夏山登山者数の2分の1程度であった。

(2) 1969～71年登山者数の推移

表5は，1969～71年高体連登山部が夏期に実施した調査の結果である。²¹⁾ この調査では，7～8月の大山頂上登山者数が詳細に数えられている。調査は，鳥取県西部の高校山岳部が中心となって，大山頂上のゴミと植生保護対策を考えるために実施された。ただし，調査期間は，学生の夏休み期間中に限定されている。

1969～71年の夏山登山者数は年次毎に変化があり，1日当りの登山者数をみると，千人前後を記録している。これは，1936年調査の約4倍弱となっている。登山道の利用をみると，夏山登山道の利用割合が8割を越えている。

(3) 1980～83年登山者数の推移

1980～83年，頂上小屋管理人の山崎瑛子氏と片岡進氏が夏山登山者数を数えた。調査記録は7月と8月連日の登山者数が残されている。¹¹⁾ 10年前の登山者数と比較するために統計の方法を表5と同一にし，調査期間を学生の夏休み期間に設定，1日当たり登山者数を出したものが表6である。

1980～83年の1日当たり登山者数をみると，69～71年調査に比べ少し増加したことがわかる。さらに，全体の登山者数でもこの80～83年は増加傾向にある。例えば，登山者総数をみると，1980～83年の4年間で1万人以上登山者数が増加している。1980年を100%とすると4年間で40%の増加となる。1980年は，大山頂上で濃霧や暴風雨など悪天候が続いたので，特に登山者が少なかったと考えられるが，天候の良かった1981年と83年を比較しても，登山者総数が約3千人増加している。

表4 大山登山者数 (1936年)

季 節	列 車 利用客	バ ス 利用客	計
春 (4-6月)	3,849	3,849	16,118
夏 (7-9月)	14,080	20,705	34,785
秋 (10-11月)	5,568	13,112	18,680
計	23,497	46,086	69,583

- 注1 大山国立公園管理管調べ。
2 登山服装者の人数を数えた。

表5 大山夏山登山者数 (1969~1971年)

年	調査期間	調査日数	登山者総数	1日平均 登山者数	夏山登山道 利用割合	正面登山道 利用割合
1969	7/20~8/15	24	23,937	1,051		
1970	7/21~8/31	36	33,660	935	85.7%	14.3%
1971	7/21~8/26	35	25,862	773	91.0%	9.0%

- 注1 高体連登山部調べ。大山頂上にて観測。
2 調査期間中、台風の日は観測していない。

表6 大山夏山登山者数 (1980~1984年)

年	調査期間	調査日数	登山者総数	1日平均 登山者数
1980	7/21~8/31	34	27,503	809
1981	7/21~8/26	35	38,875	1,111
1982	7/21~8/26	36	46,068	1,280
1983	7/21~8/26	36	41,600	1,156

- 注1 頂上避難小屋管理人、山崎瑛子氏・片岡進両氏調べ。
2 調査期間中、台風の日は観測していない。
3 山陰のくらしと気象の暦から引用。

(4) 1981~91年「登山届」にみる登山者数の推移

1981~91年の「登山届」による登山者数を集計した。その結果が表7である。「登山届」は、夏山登山道入口で登山者が自主的に記入するもので、米子警察署が保管している。記入しない登山者がいるので、このデータは実際の登山者数よりも少ないといえる。

まず第1に、登山者総数の変化をみると、近年の増減の変化が激しい。1981~86年は増加傾向にあったが、87年以降は減少傾向にある。1981年に4万7千人だった登山者数は、1984年に6万6千人まで増えた。しかし、1984年の値をピークにして87年以降は減り続け、91年の登山者数は11年間で最低となった。1991年の登山者数は3万5千人で、ピーク時84年6万6千人のほぼ2分の1の人数となった。

次に、季節別に登山者数の変化をみると、登山者総数とほぼ同様の傾向を持っているものが7

月及び8月の夏山登山者数である。1981年に2万2千人だった登山者数は、86年に3万4千人まで増加する。しかし、1987年以降漸減し91年の登山者数は1万5千人になった。1991年の登山者数は、ピーク時86年のほぼ2分の1の数値となった。

春山(4~6月)登山者数も、登山者総数と似通った傾向を示している。春山登山の場合は、1981年に8千人だった登山者数が、87年まで2万1千人まで増加する。1987年以降登山者数が漸減し91年の人数が1万人で最低となる。

1981~91年の11年間、一貫して減少し続けているのが、冬山(12月及び1~3月)登山である。1981年の時点で登山者数が4千人しかいなかったが、年毎に漸減し、91年には千百人にまで減少した。

表7 大山登山者数の推移(1981~1991年)

実 数 値 (単位:人)					
年	春山登山 4~6月	夏山登山 7~8月	秋山登山 9~11月	冬山登山 12~3月	総 数
1981	8,590	22,530	12,706	4,158	47,984
1982	15,388	22,338	9,259	4,737	51,672
1983	12,401	20,867	14,388	3,393	51,049
1984	16,658	33,296	13,031	3,416	66,401
1985	12,536	33,486	6,992	2,025	55,039
1986	16,849	34,135	8,081	1,909	60,974
1987	21,593	23,623	11,438	1,366	58,020
1988	18,414	16,765	9,348	1,670	46,197
1989	17,569	17,411	8,040	1,340	44,360
1990	14,832	15,278	7,085	1,285	38,480
1991	10,908	15,678	7,516	1,163	35,265
構 成 比 (単位:%)					
年	春山登山 4~6月	夏山登山 7~8月	秋山登山 9~11月	冬山登山 12~3月	総 数
1981	17.9	47.0	26.5	8.7	100.0
1982	29.7	43.2	17.9	9.2	100.0
1983	24.3	40.9	28.2	6.6	100.0
1984	25.1	50.1	19.6	5.1	100.0
1985	22.8	60.8	12.7	3.7	100.0
1986	27.6	56.0	13.3	3.1	100.0
1987	37.2	40.7	19.7	2.4	100.0
1988	39.9	36.3	20.2	3.6	100.0
1989	39.6	39.2	18.1	3.0	100.0
1990	38.5	39.7	18.4	3.3	100.0
1991	30.9	44.5	21.3	3.3	100.0

注 米子警察署調べ

9～11月の秋山登山者数の変化をみると、春山・夏山登山の変化の動きと一致しない。1981～87年の登山者数は、6千～1万4千人の間で不規則に増減を繰り返している。秋山は台風などがあり、年別の天候変化が激しいので、増減に規則性がないと考えられる。しかし、1988～91年の4年間は、登山者が9千人から7千人まで減少している。

最後に、総登山者数に占める季節別登山者数の比率をみると、1981～91年で、一貫して人数が多いものは、夏山登山である。1981～91年の11年間、ほぼ40%程度を占めている。最も多い時期で、1984～86年の3年間、総登山者数の50%が夏山登山者である。

逆に、一貫して数値の低いものが冬山登山である。1981～91年連続して10%に満たない低い数値が続き、かつ85年以降は4%以下の数値が続いた。

春山登山は、年内に占める比率が年々高くなっている。1981年は17.9%であったが、82～86年は連続20%台である。1987～91年は30%以上になり、その内89～90年は夏山登山者数を上回った。

秋山登山は、20%前後で不規則に増減を繰り返している。

3. 大山遭難者数

大山遭難発生件数を年別に整理したものが表8である。遭難の統計は1952年から始まっている。

まず、遭難件数の推移をみると、1952～84年の間は、54年ゼロ件という例外を除いて毎年遭難事故が発生している。最も遭難件数の多い年は1959及び60年の16件及び15件である。また、続く1961～65年も、年間6～11件の遭難が発生している。1959～65年は大山遭難発生のパーク期間となった。1966～84年は、年間10件以上の遭難が発生しなかった。年間2～8件の遭難事故が6年周期で増減を繰り返している。

1985～91年の6年間は、年間遭難件数が1件もしくはゼロ件で、ほとんど遭難事故が起ころなくなった。1985年以降に遭難事故が少なくなった要因は多数考えられる。大山の冬山登山者が減ったこと（前掲表6）、遭難防止対策強化の成果があったこと、登山者の登山技術・登山用具が高度になったこと等である。

1952年から1991年までの遭難事故を、月別に累積すると表9のようになる。被害の度合いを死亡、重傷、軽傷に分けて表にした。

死亡と重傷の件数は1～2月の冬山登山に多い。1月の死亡者数23人重傷者数15人、2月の死亡者数16人重傷者数5人となる。冬山登山は、雪、暴風、寒さ及び雪崩等の危険な要因が多いので、深刻な被害を生じている。軽傷者数が最も多いのは、7月及び8月の夏山登山である。7月の軽傷者数21人8月の軽傷者数15人となった。

4. 1982年アンケート調査の結果と考察

(1) 1982年アンケート調査の概要

1982年のアンケート調査は、大山登山者を対象に行なわれた。¹⁷⁾ 調査日程は、登山最盛期である8月8日、15日、21日及び25日、補助的に10月24日と31日になった。調査方法は夏山登山道入口（8月15日は元谷で並行）で、下山者を対象に聞き取り調査を行ない、1パーティーにつき1枚

表 8 遭難件数・遭難者数年別推移(1952～1991年)

年	遭難件数	遭 難 者 数			
		死亡	重傷	軽傷	計
1952	2	1		1	2
1953	3	2	1	1	4
1954	5	3	5	1	9
1955					
1956	5	1	1	1	3
1957	5	6	1		7
1958	5	2	1	3	6
1959	16	8	2	6	16
1960	15	2	3	5	10
1961	8	3	2	2	7
1962	6	1	4	2	7
1963	8	5		3	8
1964	11	9	2	7	18
1965	10	3	1	4	8
1966	4	1	1	2	4
1967	3	5			5
1968	7	2	3	2	7
1969	8	3	3	4	10
1970	6	5		5	10
1971	6	2		4	6
1972	3	4		1	5
1973	2	2			2
1974	4	2	3	1	6
1975	8	2	5	4	11
1976	7	2	3	5	10
1977	1	1			1
1978	3	1	1	3	5
1979	2	1	1		2
1980	3	2		3	5
1981	5	2	2	2	6
1982	4	1	2	1	4
1983	2		2	1	3
1984	4		3	2	5
1985	1	1	2		3
1986	1	1			1
1987					
1988	1	1			1
1989					
1990					
1991					

注 米子警察署調べ

表 9 大山遭難者月別累積人数(1952～1991)

月	遭 難 者 数			
	死亡者数	重傷者数	軽傷者数	計
1	23	15	11	49
2	16	5	3	24
3	9	2	4	15
4	7	4	1	12
5	1	2	4	7
6	4	2	5	11
7	5	1	21	27
8	6	7	15	28
9	2	4	1	7
10	5	5		10
11	4	3	3	10
12	4	4	9	17
計	86	54	77	217

注 米子警察署調べ

のアンケート記入であった。現地調査の他に、保養所、旅館、駐在所及びキャンプ場でも登山者に記入を依頼している。有効回答数は898件であった。

(2) 1982年アンケート調査の結果

1982年アンケートにより登山者の基本属性と行動を整理したものが表10である。調査項目は、年齢、パーティーの構成、リーダーの登山経験、コース、日程及び現住所であった。単純集計の結果から考察する。

まず、登山者は、若年層が多いことがわかる。最も比率の高いのが15才以下の37.2%である。31～40才の20.0%が次いで多い。残りのほとんどは、16～30才の間に属する。51歳以上は1.7%しかおらず、高齢者登山はわずかである。

次に、パーティーの構成をみると、最も多いのが家族登山で52.5%を占めている。次いで仲間同士の登山が多く、職場、学校、近所及びサークル仲間での登山であり、各々合わせると27.4%になる。単独登山は11.2%で少ない。

リーダーの登山経験をみると、はじめてが30.7%、2～3回が32.5%であり、あわせて63.2%の登山者が登山経験が浅いことが明らかになった。

登山コースをみると、92.7%が夏山登山道を利用しており、しかも麓と頂上の往復である。

日程は、小旅行が中心である。一泊が46.7%で最も多く、次いで日帰りが32.9%と多い。

最後に現住所をみると、岡山が最も多く24.5%を占めている。次に多いのが、大阪と兵庫を合わせた20.5%である。さらに広島及び鳥取が各15%程度占めている。大阪と兵庫以外は大山近隣の利用が多いことがわかる。

以上のように、1982年のアンケート調査結果によると、大山登山の現代的な特徴は、近代から現代にかけて発展してきた『行楽登山』にあると言える。

1982年時点の登山行動で最も多いパターンは、鳥取、岡山及び広島など近隣県または兵庫及び大阪の人が、家族あるいは簡単に誘える仲間同士で、一泊もしくは日帰りの日程で登山旅行にやって来る。子供がいることや登山経験が浅いことなどの理由から、登山コースの中で最も簡単な夏山登山道往復コースを選択する。各項目の回答比率から、大山登山にやってきたほとんどの人が、この行動をとっていると考えられる。もっとも、調査時期が行楽シーズンであったこと、日程が短いこと、登山コースが夏山登山道往復であることから「行楽」の要素が強く出たわけである。

この結果を踏まえて、1992年は同様の質問項目を盛り込み、さらに現代における大山登山の行動特性を探るアンケート調査を実施することにした。

表10 1982年度大山登山者アンケート調査の結果

質問事項	回答項目	人数又は パーティー数	総数に占める 割合 (%)
登山者の年齢 (単位：人)	15歳以下	1,304	37.2
	16～20歳	433	12.4
	21～25歳	363	10.4
	26～30歳	392	11.2
	31～40歳	706	20.2
	41～50歳	246	7.0
	51歳以上	59	1.7
	計	3,503	100.0
パーティーの構成 (単位：パーティー)	単独	80	11.2
	家族	374	52.5
	職場の仲間	78	10.9
	学校の仲間	62	8.7
	近所の仲間	31	4.3
	サークルの仲間	25	3.5
	山岳会	13	1.8
	その他	50	7.0
計	713	100.0	
リーダーの登山経験 (単位：人)	はじめて	260	30.7
	2～3回	276	32.5
	4～9回	156	18.4
	10回以上	156	18.4
計	848	100.0	
コース (単位：パーティー)	夏山登山道往復	783	92.8
	夏道-縦走-元谷	34	4.0
	その他	27	3.2
計	844	100.0	
コース (単位：パーティー)	日帰り	238	32.9
	1泊	338	46.7
	2泊	129	17.8
	3泊以上	18	2.5
計	723	100.0	
現住所 (単位：パーティー)	鳥取	128	14.3
	岡山	220	24.5
	広島	142	15.8
	島根	55	6.1
	山口	42	4.7
	四国	13	1.4
	大阪・兵庫	184	20.5
	九州	18	2.0
	その他	96	10.7
計	898	100.0	

注1 自然保護・利用研究会調べ

2 調査日：8月8・15・21・25日，10月24・31日

3 調査地：夏山登山道入口・元谷・大山寺宿泊施設・大山寺駐在所

Ⅲ 現代登山の行動分析

1. アンケート用紙の製作と調査の実施

この調査では実際に登山を行なった者へのアンケート調査を行なうことによって、登山者の具体的な行動と意識を明らかにするのが目的である。まず予備調査を行ない、現地の状況と登山者の視点を確かめた上でアンケート用紙を作成した。

アンケート項目として、登山者の属性と登山行動をみるため、①性別、②年齢、③職業、④居住地、⑤グループ、⑥交通手段、⑦日程、⑧登山コース、⑨登山キャリアの質問を設けた。次に、意識調査については、予備調査の後、登山時の感想を幾つか想定し、そのタイプを顕著にあらわす質問を設定してアンケート項目とした。また、大山の景観を代表する視覚的因子を評価する質問項目も設定した(図3)。

アンケート調査は3回行なったが、第2次及び第3次アンケート調査は調査用紙を改良している。改良版アンケートを図4に示した。意識面の調査項目を3段階評価に変え、難易度を付け加えている。

調査は、登山者を捕捉しやすく、また登山者自身の気持ちが高まっていると考えられる大山山頂で実施した。調査日として、人数増が予測されるゴールデンウィーク、大山山開き祭、お盆及び紅葉期に設定した。日時は、5月3日10～14時・5月4日8～12時、6月6日14～16時・6月7日8～11時、8月15日10～14時である。なお、紅葉期(10月18及び25日)の調査を予定していたが、天候

下記の設問にお答え下さい。

問1 性別 (男・女) 問2 年齢 () 問3 職業 ()

問4 どちらの地域から来られましたか。() 部・道・府・県 郡・市

問5 どのようなグループで来られましたか。該当する番号に○印をつけて下さい。
①個人 ②家族 ③友人・知人 ④団体 ⑤その他 ()

問6 交通手段について、該当する番号に○印をつけて下さい。
①自家用車 ②公共交通機関(汽車・バス等) ③観光バス ④バイク ⑤その他 ()

問7 今回の登山の全日程について、該当する番号に○印をつけて下さい。
①日帰り ②一泊以上 (泊) (大山地区宿泊地:)

問8 登山歴は今年で何年になりますか。該当する番号に○印をつけて下さい。
①今回がはじめて ②1年～2年 ③3年～5年 ④6年～9年 ⑤10年以上

問9 昨年度、何回大山で登山をされましたか。該当する番号に○印をつけて下さい。
①無し ②1回 ③2回～3回 ④4回～7回 ⑤8回以上

問10 頂上に立ったときの感想をお尋ねします。次の項目のうち自分の感想に近いものに○印をつけて下さい。
①やったー！ここまで登ってきた甲斐あった！！ ②なんでもここまでして登らないかんねん
③ちょっともの足りんなー ④計画通り順調にいったな

問11 あなたは今頂上からふもとを見おろしています。その時の自分の気持ちに近いものに○印をつけて下さい
①自然って素晴らしいなー、偉大だなー ②彼女(彼・子供達)とこの眺めを見て本当に良かったな
③いずれマッキンリーを制覇してやるぞ ④明日からまた仕事(学校)が始まるな
⑤この大きな自然とくらべ、今までのちっぽけな私の人生とは一体何だったのだろうか？

問12 大山登山を行ってもっとも印象深かった場面3つをお答え下さい。次の項目の中で該当する番号3つに○印をつけて下さい。
①山上から見おろすふもとの景色 ②ダイセンキャラボクの純林 ③山頂付近の岩肌 ④ブナの原生林
⑤大山の河原、又は大山滝 ⑥大山寺・大神山神社 ⑦ふもとから見上げる大山の姿 ⑧その他

問13 今後、大山に登りたいと思いますか。該当する番号に○印をつけて下さい。
①これからもぜひ登りたい ②機会があれば登ってみたい ③もう登りたくない

問14 本日の登山コースとこれからの登山コースをお答え下さい。
該当するコースの番号に○印を付けて下さい。
(登ってきた登山コース)
①夏道コース ②元谷コース ③三古峰コース ④船上山コース ⑤地獄谷コース
⑥烏ヶ山尾根縦走コース ⑦烏ヶ山コース
(帰り及び明日の登山コース)
①夏道コース ②元谷コース ③三古峰コース ④船上山コース ⑤地獄谷コース
⑥烏ヶ山尾根縦走コース ⑦烏ヶ山コース

図3 第1回大山登山アンケート調査用紙

不順により中止した。天候は、6月7日の暴風雨を除き、おおむね晴れていた。

調査形式は、調査員による聞き取りアンケートで、無作為に選ばれた登頂者に回答してもらった。有効回答数は、5月3日及び4日が195、6月6日及び7日が115、8月15日が114であった。なお、5月調査においては、登頂人数のカウントも行なったが、調査期間中の登頂者の延人数は932人、アンケート票の回答率は21%であった。

下記の設問にお答え下さい。

問1 性別 (男・女) 問2 年齢 (才) 問3 職業 ()

問4 どちらの地域から来られましたか。(都・道・府・県 郡・市)

問5 どのようなグループで来られましたか。該当する番号に○印をつけて下さい。
①個人 ②家族 ③友人・知人 ④団体 ⑤その他 ()

問6 交通手段について、該当する番号に○印をつけて下さい。
①自家用車 ②公共交通機関(汽車・バス等) ③観光バス ④バイク ⑤その他

問7 今回の登山の全日程について、該当する番号に○印をつけて下さい。
①日帰り ②一泊以上 (泊) (大山地区宿泊地:)

問8 あなたの登山キャリアをお尋ねします。該当する番号に○印をつけて下さい。
①今回がはじめて ②過去1・2回登ったことがある ③2・3年に一度は登山をする
④過去5年以上毎年登っている ⑤過去10年以上毎年登っている ⑥その他

問9 大山登山は始めてですか。該当する番号に○印をつけて下さい。
①今回がはじめて ②過去1・2回登ったことがある ③よく登る方だ ④毎年必ず登る

問10 大山登山の難易度をお尋ねします。「平地の散歩(10分間)」を難易度0、「エベレスト山頂制覇」を難易度100とすると、大山登山(山頂まで)の難易度はどの程度でしょうか。グラフ上に矢印()で示して下さい。ご自分の感覚でお答え下さい。

難易度 0 50 100
(平地10分間の散歩) (エベレスト山頂制覇)

問11 大山登山の印象度をお尋ねします。各場面における印象度合をお答え下さい。A~Cの中で1つ選び○印をつけて下さい。

印象度

	強い	やや強い	普通
①山上から見おろすふもとの景色	A _____	B _____	C _____
②ダイセンキャラボクの純林	A _____	B _____	C _____
③山頂付近の岩肌	A _____	B _____	C _____
④ブナの原生林	A _____	B _____	C _____
⑤ふもとから見上げる大山の姿	A _____	B _____	C _____

問12 今回の大山登山の感想をお聞きします。それぞれの項目についてご自分の感想に近いものに○印をつけて下さい。

①おもしろかったか?	大変おもしろかった・	おもしろかった・	おもしろくなかった
②きびしかったか?	大変きびしかった・	きびしかった・	きびしくなかった
③楽しかったか?	大変楽しかった・	楽しかった・	楽しくなかった
④心がいやされたか?	大変心がいやされた・	心がいやされた・	心がいやされなかった
⑤崇高だったか?	大変崇高だった・	崇高だった・	崇高でなかった
⑥危険だったか?	大変危険だった・	危険だった・	危険でなかった

問13 本日の登山コースとこれからの登山コースをお答え下さい。該当するコースの番号に○印を付けて下さい。

(登ってきた登山コース)

①夏道コース ②元谷コース ③三古峰コース ④船上山コース ⑤地獄谷コース
⑥烏ヶ山尾根縦走コース ⑦烏ヶ山コース

(掃り及び明日の登山コース)

①夏道コース ②元谷コース ③三古峰コース ④船上山コース ⑤地獄谷コース
⑥烏ヶ山尾根縦走コース ⑦烏ヶ山コース

図4 第2・3回大山登山アンケート調査用紙

2. 登山者の基本特性

(1) 登山者の個人属性

3回のアンケート調査を通して、まず、単純集計を行なった。共通の項目によって、各調査の結果を比較分析した。有効回答数にばらつきがあるので、回答総数を100とした構成比を算出し、表11に示した。なお、表中のゴールデンウィークは5月3日及び4日、山開き祭は6月6日及び7日、お盆は8月15日の日程を示している。

①男女比を比較すると、全ての調査において男女比6対4で、男性の数が上まわっている。

②年代を比較すると、全体的に年代の高いのはゴールデンウィークとなり、低いのが山開き祭となった。ゴールデンウィークの回答をみると、50代が30.4%で最も多くなっている。次に多いのは40代の28.8%であり、40才以上は全体の62.9%になった。また、山開き祭をみると、最も多

表11 1992年大山登山者アンケート調査の結果

質問事項	回答項目	実 数 値 (単位:人)			構 成 比 (単位:%)		
		ゴールデン ウィーク	山開き祭	盆	ゴールデン ウィーク	山開き祭	盆
性 別	男	128	73	73	65.6	64.0	63.5
	女	67	41	42	34.4	36.0	36.5
	計	195	114	115	100.0	100.0	100.0
年 代	20歳未満	3	3	8	1.6	2.6	7.0
	20代	22	39	29	11.5	34.2	25.2
	30代	46	26	36	24.1	22.8	31.3
	40代	55	21	32	28.8	18.4	27.8
	50代	58	18	7	30.4	15.8	6.1
	60代以上	7	7	3	3.7	6.1	2.6
	計	191	114	115	100.0	100.0	100.0
職 業	会社員	82	66	48	42.5	60.6	41.7
	学生	38	2	12	19.7	1.8	10.4
	公務員	25	16	18	13.0	14.7	15.7
	主婦	21	6	16	10.9	5.5	13.9
	自営業	13	5	3	6.7	4.6	2.6
	その他	14	14	18	7.3	12.8	15.7
	計	193	109	115	100.0	100.0	100.0
居 住 地	鳥取県	22	20	28	11.3	17.7	24.3
	島根県	7	10	5	3.6	8.8	4.3
	岡山県	44	15	18	22.6	13.3	15.7
	広島県	33	40	16	16.9	35.4	13.9
	近畿地方	49	22	36	25.1	18.6	31.3
	その他	40	7	12	20.5	6.2	10.4
	計	195	113	115	100.0	100.0	100.0
グループ	家族	100	14	83	51.5	12.3	72.2
	友人・知人	46	68	29	23.7	59.6	25.2
	団体	33	24	0	17.0	21.1	0.0
	個人	15	8	3	7.7	7.0	2.6
	計	194	114	115	100.0	100.0	100.0
交通手段	実家用車	154	93	96	79.0	81.6	83.5
	自動車・バス	33	2	17	16.9	1.8	14.8
	観光バス	0	8	0	0.0	7.0	0.0
	その他	8	11	2	4.1	9.6	1.7
	計	195	114	115	100.0	100.0	100.0
日 程	日帰り	61	33	62	31.3	29.2	54.4
	一泊	68	76	28	34.9	67.3	24.6
	二泊	52	4	17	26.7	3.5	14.9
	三日以上	14	0	7	7.2	0.0	6.1
	計	195	113	114	100.0	100.0	100.0
登 り コ ー ス	夏道コース	181	106	112	94.8	97.2	99.1
	元谷コース	8	3	1	4.2	2.8	0.9
	その他	2	0	0	1.0	0.0	0.0
	計	191	109	113	100.0	100.0	100.0
登 り コ ー ス	夏道コース	110	71	70	57.9	67.0	64.8
	元谷コース	73	35	35	38.4	33.0	32.4
	その他	7	0	3	3.7	0.0	2.8
	計	190	106	108	100.0	100.0	100.0

注1 鳥取大学環境評価学研究室調べ

2 調査日: 5月3・4日(ゴールデンウィーク), 6月6・7日(山開き祭), 8月15日(盆)

3 調査地: 大山頂上避難小屋

いのが20代で34.2%，次いで30代が22.8%である。さらに，お盆の結果をみると，30代が31.3%で最も多かった。なお，3回の調査を通して20才未満の人数が低いのは，回答者に子供が含まれていないからである。

③職業を比較すると，各調査を通して会社員や公務員等サラリーマンが最も多い。特に山開き祭では，会社員と公務員を合わせて75.3%になった。ゴールデンウィークはサラリーマンに次いで学生が19.7%であった。

④居住地域を比較すると，全体的に岡山及び広島が多い。まず，ゴールデンウィークをみると，岡山が22.6%で最も高くなっている。山開き祭をみると，広島が35.4%で最も高い。しかし，お盆は鳥取あるいは近畿地方の登山者が多くなった。お盆は，近畿地方が31.3%で最も高く，次いで鳥取が24.3%となっている。このように，登山者の地域構成をみると，意外に鳥取及び島根の山陰地方が少なく，岡山及び広島が多い。また，連休のようなまとまった休日がとれる期日には近畿地方の登山客が増えることがわかった。

(2) 登山者の行動特性

⑤グループ区分を比較すると，ゴールデンウィークとお盆には家族で50%以上を占めており，最も多くなっている。山開き祭は友人または知人が多く59.6%を占めており，反対に家族は12.3%しかいなかった。この家族中心のグループを「家族登山」，友人または知人中心のグループを「仲間登山」と名付ける。明らかに「家族登山」の方が出現頻度が高い。

⑥交通手段についてはどの時期も自家用車が80%前後を占めている。

⑦日程は，どの時期も日帰り又は1泊が多かった。ただし，ゴールデンウィークの日程は，日帰りから2泊まで幅広い。山開き祭では1泊の登山客が67.3%，お盆は日帰り客が54.4%であり，日程が非常に短いということがわかった。

⑧登山コースの選択をみると，どの調査でも，登りの90%以上が夏山登山道を使用している。下りは60%前後が夏山登山道を，30%前後の登山者が元谷コースをたどっている。どちらのコースも，初心者が登れる短距離コースである。

表12 大山登山者の登山キャリアⅠ

登 山 歴	実 数 値 (単位：人)	構 成 比 (単位：%)
は じ め て	48	24.9
1 年 ~ 2 年	25	13.0
3 年 ~ 5 年	34	17.6
6 年 ~ 9 年	25	13.0
10 年 以 上	61	31.6
計	193	100.0

注 調査日：5月3・4日

表13 大山登山者の登山キャリアⅡ

実 数 値 (単位：人)		
登 山 経 験	山開き祭	盆
5年以上毎年登る	51	21
2・3年に一度登る	14	18
過去に1・2回あり	28	57
登山経験なし	20	19
計	113	115
構 成 比 (単位：%)		
登 山 経 験	山開き祭	盆
5年以上毎年登る	45.1	18.3
2・3年に一度登る	12.4	15.7
過去に1・2回あり	24.8	49.6
登山経験なし	17.7	16.5
計	100.0	100.0

注 調査日：6月6・7日，8月15日

なお、⑨登山キャリアについては、大山登山を含めて、その人の全ての登山キャリアを質問した。ゴールデンウィークと他では調査項目に違いがあるため、別個に集計し、表12および表13に示した。登山キャリアは経験の多い人と少ない人の差が激しい。ゴールデンウィークの場合、登山経験の年数を聞いたところ、10年以上登っている人が全体の31.6%を占めている。はじめて山に登るという回答も、24.9%と多かった。しかし、年数だけ聞いたので、登山経験の度合まではわからなかった。そこで、山開き祭とお盆では、経験の度合いを登山回数で質問した。山開き祭は5年以上毎年登っているという回答が45.1%で、登山に熱心な層が多い。お盆は、過去1回または2回登山経験ありという、登山に不慣れな層が49.6%を占めた。

(3) 行動アンケートのまとめ

大山における現代的な登山の特徴は、「家族登山」といえる。歴史的にみれば『行楽登山』のタイプに属する。「家族登山」の利用者の行動パターンは、自家用車によるドライブを兼ねた登山小旅行である。利用者の地域からみて、中国地方から近畿地方の居住者が1泊もしくは日帰りでの短時間の登山を楽しんでいる。つまり、「家族登山」の特徴は、「安、近、便」の一言にまとめられる。なお、「家族登山」の回答者の登山キャリアをみると、初めて登山をする、過去1回または2回登山経験ありという登山に不慣れな人が多い一方で、5年以上毎年登っているというキャリア組も結構登っており、キャリアの上で2極分化がみられる。

しかし、山開き祭の結果は、少し違ったものになり「仲間登山」が多かった。「仲間登山」の場合、登山キャリアは全体的に高く、友人または知人グループを組んでいる。そのほとんどが仕事を持った社会人であった。

なお、今回の調査を前述の1982年調査と比較すると、同様の登山行動の形態と認められる。現代における大山登山は、『行楽登山』その中でも特に「家族登山」が登山の典型として定着した。

3. 登山者の登山意識分析

(1) 分析の方法

登山者の意識を探るため、まず第1に、①登山者にとって印象深い景観、②大山登山の難易度の2項目について単純集計を行ない、大山への評価を分析した。

第2に、第1回アンケート調査の、意識面を問う質問項目（前掲図3、問10、11、13）を組み合わせ、クラスター分析によって意識別に登山者を区分した。分析にあたって非類似度は標準化ユークリッド平方距離にもとづいて定義し、ワード法による分類を行なった。さらに、登山意識別に、登山者の個人属性と行動をクロス集計して、登山者の特徴を探った。

第3に、第2回及び第3回アンケート調査も意識調査によって同様に登山者意識の分析を行なった。前掲図4問11と12の質問項目を組み合わせて、登山者の個人属性別に数量化Ⅲ類を用いて多変量解析し、その特徴を探った。

(2) 単純集計にみる登山者の感想

ゴールデンウィークでは、最も印象の強かった視点を3つ選択してもらった。その結果が図5である。

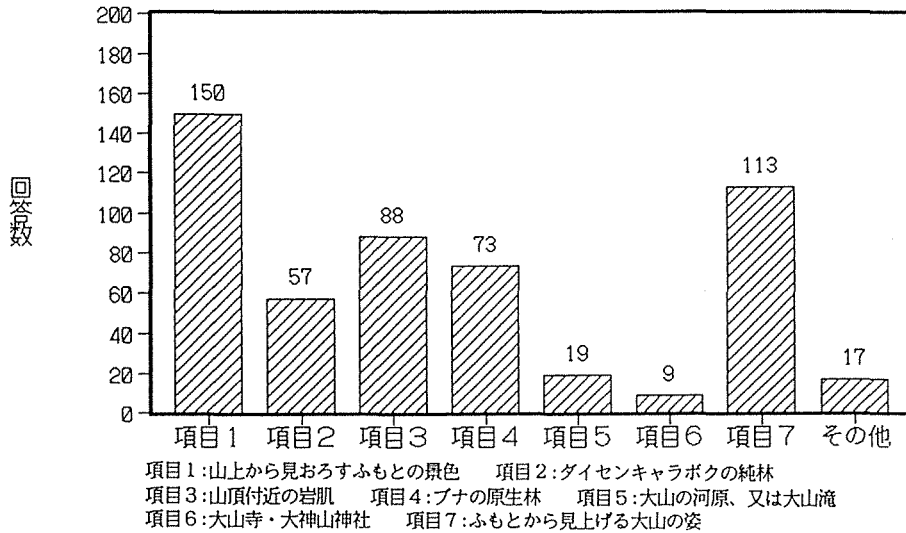


図5 大山で印象の強かった因子（5月3・4日）

登山者が好むのは、まず大風景であり、次に身近に見える自然物へ心が向かう。具体的にみると、印象が一番強いのは「山上から見おろすふもとの景色」、「ふもとから見上げる大山の姿」であり、風景として雄大なもの2つが選ばれた。次に「ダイセンキャラボクの純林」、「山頂付近の岩肌」、「ブナの原生林」の印象が強いが、「大山の河原または大山滝」、「大山寺、大神山神社」はほとんどの人に無視されている。

大山の河原や滝は夏山登山道から見えないので、印象度が弱いと考えられる。また、大山寺・大神山神社の印象度が弱いことから、現在の大山登山はかつての信仰登山とは大きく異なっていることがわかる。

次に、難易度別に回答数を整理したグラフが図6であり、難易度は必ずしも高くないことがわかった。エベレストへ登るとした場合を100とすると10から59の間が多く、60以上と答える人は少ない。

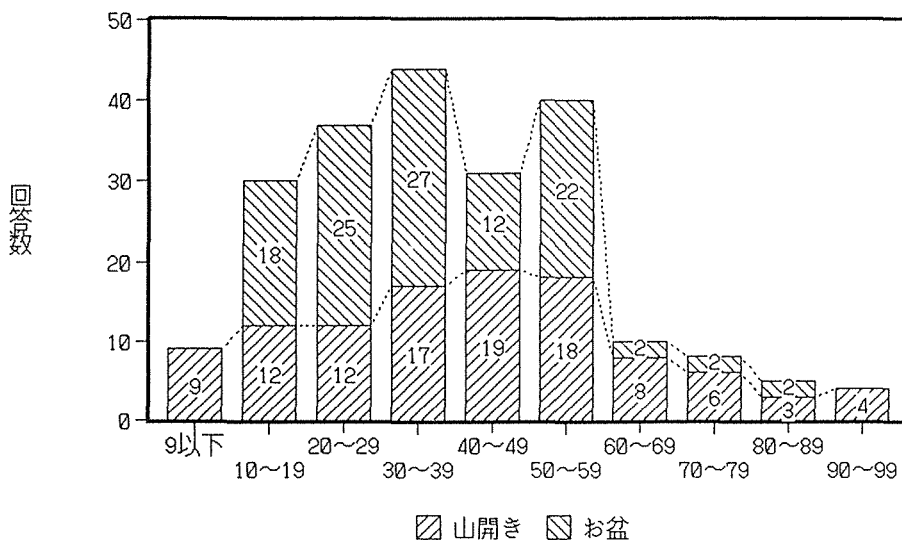


図6 大山登山難易度（6月6・7日，8月15日）

注) 難易度の値は『平地10分間の散歩』を『0』、『エベレスト山頂制覇』を『100』とした場合の数値である。

(3) クラスタ分析にみる登山者特性

1) 分析の過程

ゴールデンウィーク調査の質問項目である前掲図3, 問10, 11, 13の結果を使用して, クラスタ分析を行ない図7の結果を得た。デンドログラムの分ける3つの意識特性I, II, IIIに特殊な意識特性IVを入れて, 4つの登山意識特性が区分される。また, 区分された意識特性から, それぞれ名称を①行楽意識, ②計画意識, ③無関係意識, ④疲労意識と名付けた(表14)。それぞれの質問項目との相関関係は, ①行楽意識は, 「やったー!ここまで登ってきた甲斐あった!」, 「自然って素晴らしいなー, 偉大だなー」, 「彼女(彼, この子達)とこの眺めを見られて本当に良かったなあ」等の項目が組み合わさっており, ②計画意識は「計画通り順調にいったな」という項目, ③無関係意識は「明日からまた仕事(学校)が始まるな」, 「この大きな自然とくらべ, 今までのちっぽけな私の人生とは一体何だったのだろうか?」という項目, ④疲労意識は「なんでここまでして登らないかんねん」, 「もう登りたくない」という項目が, それぞれ組み合わさっている。

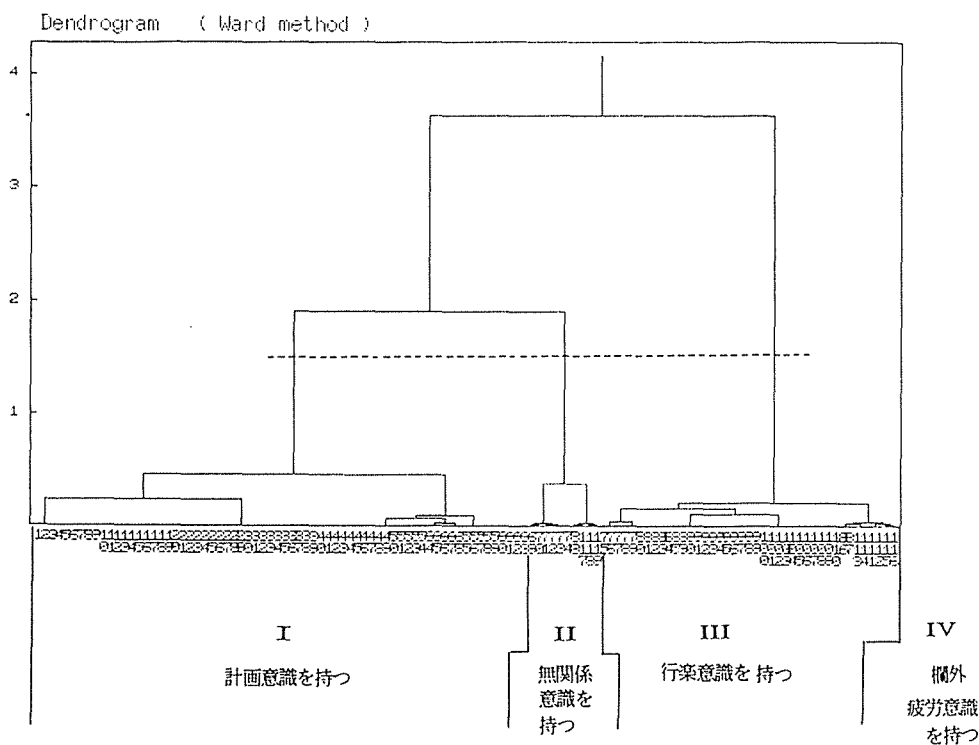


図7 クラスタ分析による登山者分類

表14 登山者の意識特性

名称	登頂後の感想	人数(人)	全体数に対する割合(%)
行楽意識	達成感, 自然との接触, 人間同士のふれあいを楽しむ	108	58.3
計画意識	登山の計画性を楽しむ	55	29.4
無関係意識	山とは全く無関係の事を考える	14	7.5
疲労意識	疲労感を持ち再訪意欲が低い	9	4.8

2) クラスタ分析の結果

一番多いのは、①行楽意識を持つ登山者で全体の58.3%を占める。次に多いのが、②計画意識を持つ登山者で全体の29.4%であった。④疲労意識を持つ登山者は全体の4.8%しかおらず、大山登山にマイナスイメージを持つ登頂者は少数だということがわかった。無視できないのが、山と無関係なことを考える、③無関係意識を持つ登山者である。登山者全体の7.5%なのでごく少数だが、行楽的なレクリエーション意識とは違ったレクリエーション意識の存在を示唆している。

3) 登山者意識特性からみた登山行動

意識特性別に個人属性・行動特性とのクロス集計を行った。その中で、特に意識特性と相関関係のあった登山グループ区分と登山歴区分について説明する。

まず、表15は意識特性とグループ構成をクロス集計した結果であり、特徴的な点は次の2点である。

- ①行楽意識を持つ登山者の62.0%，計画意識を持つ登山者の40.0%を「家族登山」が占めている。
- ②無関係意識を持つ登山者の35.7%が「仲間登山」，28.6%が「単独登山」であること。

すなわち、行楽意識と「家族登山」は深い相関関係がある。また、無関係意識を持つ登山者が個性的な思考に至るのは、「仲間登山」あるいは「単独登山」の場合が多い。

次に、表16は意識特性と登山歴をクロス集計した結果であり、特徴的な点は次の通りである。

- ①疲労意識を持つ登山者は全員登山の初心者である。
- ②行楽意識を持つ登山者の登山歴は全体的に低い（43.6%が登山歴2年以下）。
- ③計画意識を持つ登山者の登山歴は全体的に高い（48.1%が登山歴10年以上）。
- ④無関係意識を持つ登山者の登山歴は非常に高い（50.0%が登山歴10年以上）。

この結果から意識特性は登山歴の年数にともなって、疲労意識→行楽意識→計画意識→無関係意識と移行していると考えられる。

表15 意識特性×グループ構成

		意識特性	個人	家族	友人	団体	計
実 数 値 (人)	行 楽 意 識		4	67	27	10	108
	計 画 意 識		6	22	17	10	55
	無 関 係 意 識		4	3	5	2	14
	疲 労 意 識			3	3	3	9
		計	14	95	52	25	186
		意識特性	個人	家族	友人	団体	計
構 成 比 (%)	行 楽 意 識		3.7	62.0	25.0	9.3	100.0
	計 画 意 識		10.9	40.0	30.9	18.2	100.0
	無 関 係 意 識		28.6	21.4	35.7	14.3	100.0
	疲 労 意 識			33.3	33.3	33.3	100.0

表16 意識特性×登山歴

意識特性		始めて	1～2年	3～5年	6～9年	10年以上	計
実数 値 (人)	行楽意識	29	18	24	14	23	108
	計画意識	7	5	10	6	26	54
	無関係意識	2	1		4	7	14
	疲労意識	9					9
計		47	24	34	24	56	185

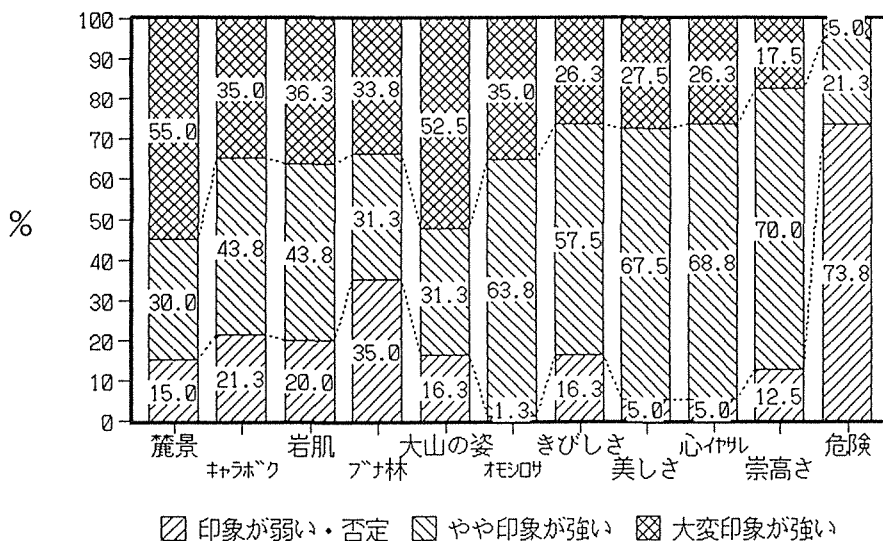
意識特性		始めて	1～2年	3～5年	6～9年	10年以上	計
構成比 (%)	行楽意識	26.9	16.7	22.2	13.0	21.3	100.0
	計画意識	13.0	9.3	18.5	11.1	48.1	100.0
	無関係意識	14.3	7.1		28.6	50.0	100.0
	疲労意識	100.0					100.0

(4) 数量化Ⅳ類にみる登山者意識の特徴

1) 分析の過程

第2回及び3回アンケート調査（6月6日及び7日，8月15日）では視覚的因子を含む意識調査を行ない、「家族登山」と「仲間登山」の違いを出そうとした。この場合の「仲間登山」とは、友人または知人での登山のことである。「家族登山」と「仲間登山」の双方とも，同じ『行楽登山』の流れを汲むものであるが，前述のクラスター分析の結果では特に「家族登山」に行楽意識が強く出ていた。さらに，登山意識まで掘り下げて検討してみた。

そこで，まず，前掲図4の問11と問12の回答を，「家族登山」と「仲間登山」別個に単純集計して，図8と図9の結果を出した。しかし，単純集計では，「家族登山」と「仲間登山」の違いがほとんど出なかった。「家族登山」，「仲間登山」の回答数はそれぞれ77，81であるが，総数を100とした構成比をグラフで示した。図8と9を比較すると，グラフの傾向はほとんど同じである。視覚的因子で最も印象の強いものは，「山上からみるふもとの景色」，「ふもとからみる大山の姿」



注：回答総数77を百分率に直して図示している。

図8 大山登山の印象（グループ：家族）

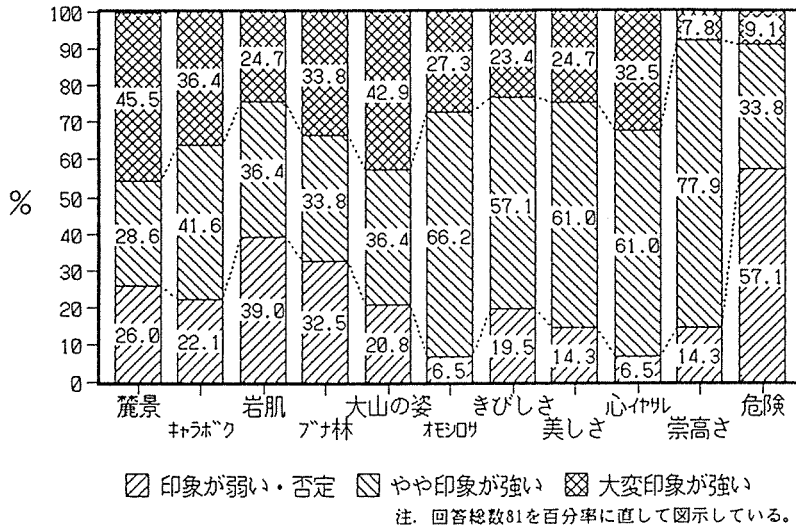


図9 大山登山の印象（グループ：友人・知人）

の2項目となった。感想（以下、心意的因子という）で最も強い項目は、「おもしろかった」、「心がいやされた」の2つである。反対に、「危険であったか」という問いに対しては、「危険でなかった」と否定する回答が多かった。

単純集計で違いが出てこなかったため、同じデータを用いて数量化Ⅲ類を用いて多変量解析を行ない、違いをみることにした。計算にあたってダミー変数を、「大変印象が強い」→1, 「やや印象が強い, 印象が弱いあるいは否定」→0と置いた。なお、数量化Ⅲ類に使用した有効回答数と計算結果の固有値を表17に示した。

2) 数量化Ⅲ類の結果

「家族登山」を対象にした結果が図10であり、「仲間登山」の結果が図11である。

まず、図10をみると、「家族登山」は視覚的因子と心意的因子に関係が認められる。図10の第1軸は「心意-視覚」軸であり、第2軸は視点軸である。第1軸は、プラス方向に視覚的要因、マイナス方向に心意的要因が集まっている。第2軸は、プラス方向に「近くにある」要因、マイナス方向に「遠くに見える」要因が集まっている。この軸解釈に従って登山者をA, B, C, D, 4つのグループに区分した。Aグループは、「山頂付近の岩肌」、「プナの原生林」、「ダイセンキャラボクの純林」の印象が強く「おもしろかった」という感想を持っている。Bグループは「ふもとからみた大山の姿」の印象が強く「心がいやされた」という感想を持っている。Cグループは大山登山を通して「崇高だった」という感想をもち、Dグループは「山頂から見おろすふもとの景色」の印象が強く、「美しかった」という感想を持っている。このように分類してみると、Cグループ以外はどのグループも、見る景色とその感想が直結していることがわかる。「家族登山」者の登山意識は、即物的な傾向が強く出ている。

次に、図11をみると、「仲間登山」は視覚的因子と心意的因子が全く別の次元でとらえられている。図11の第1軸は「心意-視覚」軸であり、第2軸は視点軸である。第1軸は、プラス方向に心意的要因、マイナス方向に視覚的要因が集まっている。第2軸は、プラス方向に「視点が一方方向に集中している」要因、マイナス方向に「視点に広がりがある」要因が集まっている。この

軸解釈に従って登山者をE, F, G, 3つのグループに区分した。Eグループは「きびしかった」, 「心がいやされた」という感想を持ち, Gグループは「おもしろかった」, 「崇高だった」, 「危険だった」という感想を持つが, どちらも視覚的要因につながりがない。反対に, Fグループは「山頂付近の岩肌」, 「ふもとから見る大山の姿」, 「山上から見おろすふもとの景色」, 「ブナの原生林」, 「ダイセンキャラボクの純林」の5つの視覚的要因すべてに反応しているが, 心意的要因に結び付いていない。このように, 「仲間登山」者は見る景色と感じることに結び付きがなく, 関連性が認められない。この結果は, 前述のクラスター分析で認められた無関係意識の意識構造を反映したものと考えられる。

表17 数量化Ⅲ類に使用したデータの有効回答数および固有値

グループ構成	回答数の内訳		個 有 値	
	回 答 数	有効回答数	第 1 軸	第 2 軸
家 族	77	49	0.38344	0.38344
友 人・知 人	81	53	0.38344	0.38344

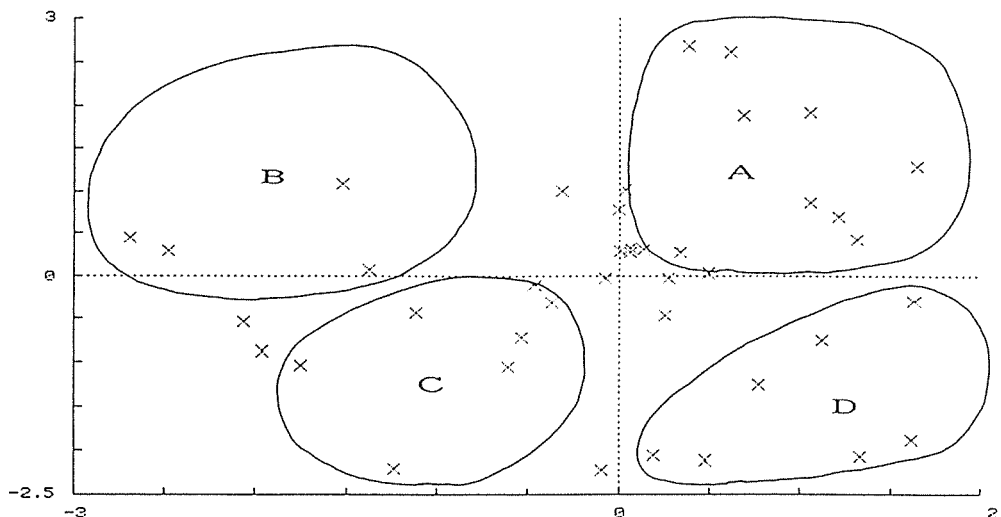
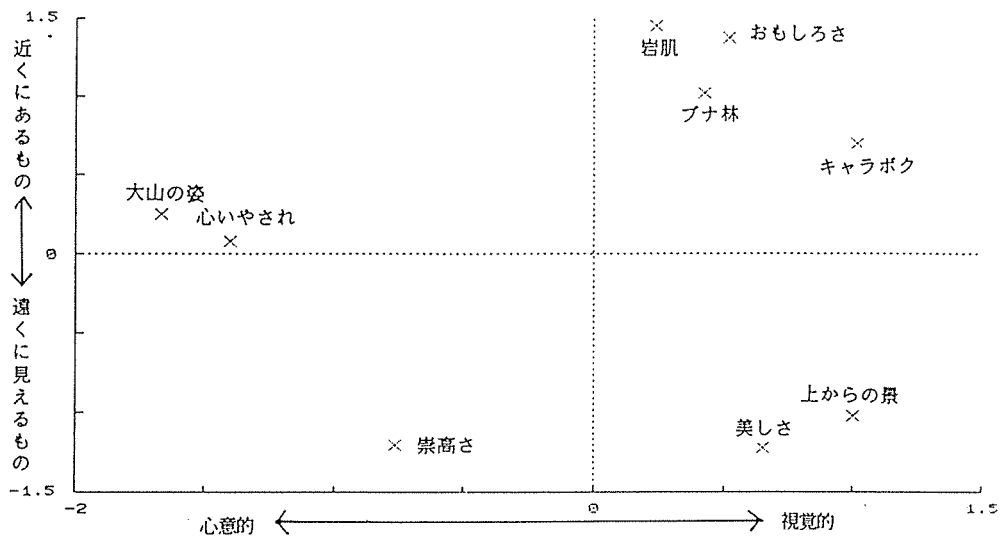


図10 登山者の意識区分 (グループ: 家族)

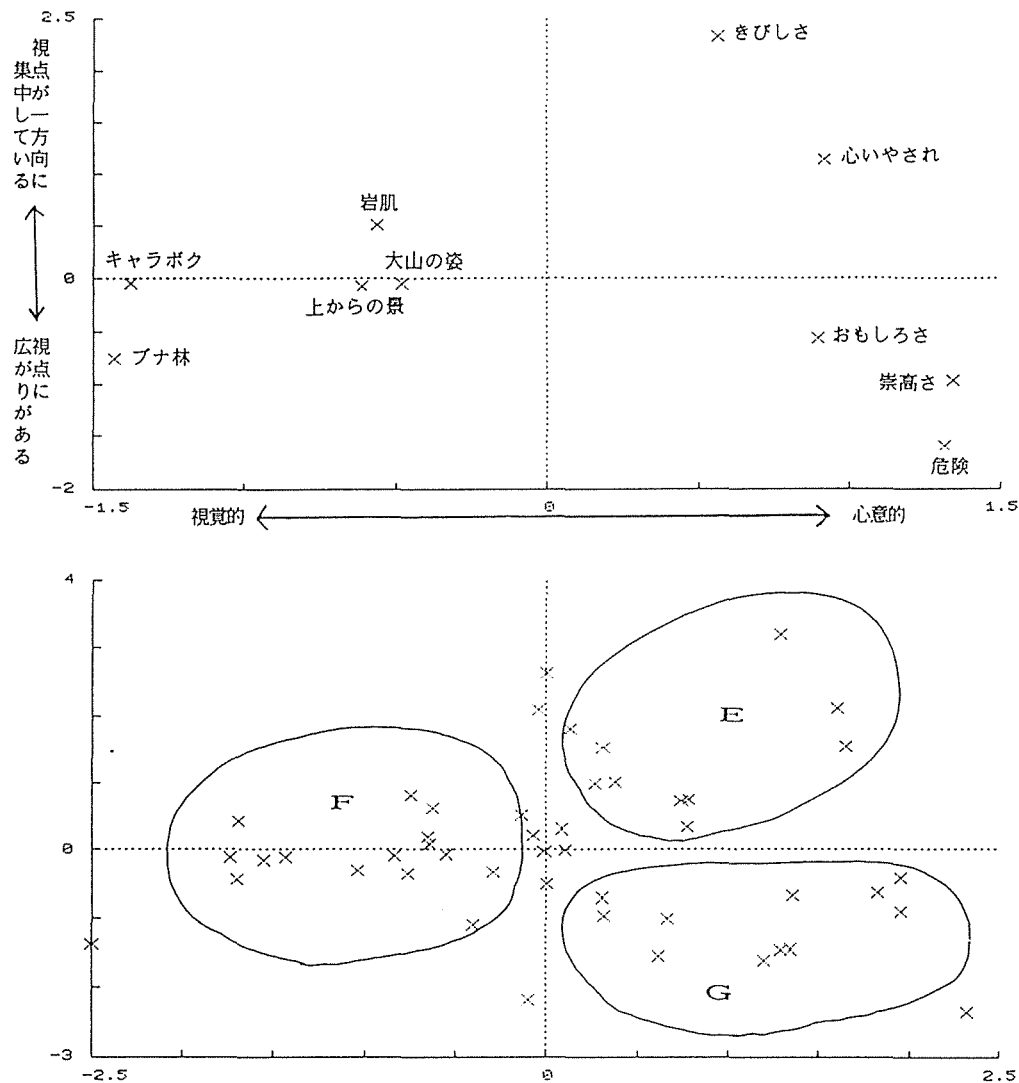


図11 登山者の意識区分 (グループ: 友人・知人)

以上のことから、「家族登山」は登山意識に即物的な傾向がみられ、「仲間登山」は心意的なイメージが卓越していることがわかった。このように、現代の大山登山の行動は、2つのタイプに代表される。第1のタイプは「家族登山」であり、登山キャリアは低く、家族相互のレクリエーションを目的とした行楽意識が強い。第2のタイプは「仲間登山」であり、登山キャリアは高く、登山意識は必ずしも単純に行楽に向かわず、内省的なものに強く動かされている。

IV 総括

以上「大山」の登山行動を対象に3つの手法を用い分析作業を進め、その評価を試みた。3つの手法と結論を以下にまとめる。

①日本海新聞の記事分析によって、既存の文献では不明な点の多い大正期以後の登山変遷を明らかにした。登山には様々な形態があり登山タイプが区分できることを実証した。さらに、今までの登山研究では見逃されがちだった『行楽登山』の存在と重要性を明らかにし、現代における登山の発展は『行楽登山』の流れを強く引き継いでいることを示した。

②登山者数データを分析することにより、近代～現代は、量的にも大山登山が発展してきたことが明らかになった。ただし、最近5年間の登山者数は頭打ちである。また、遭難者数データの分析を新聞記事分析と照らし合わせることによって、遭難者数は『行楽登山』、『アルペンスポーツ登山』の最も盛んとなった時期に同調してピークに達したこと、その後『遭難防止登山』が定着するにつれて減少してきたことが明らかになった。

③アンケート調査分析によって、現在の大山登山は『行楽登山』の中でも、特に「家族登山」が主流であることを結論づけた。また、「家族登山」に次いで「仲間登山」も大山登山の主要なタイプである。

まず、「家族登山」の行動パターンは、中国地方（または近畿地方）在住のサラリーマン家庭が、自家用車を利用して日帰りもしくは1泊のドライブを兼ねた登山旅行をし、大山の最短距離登山コースを往復するというものである。登山キャリアは低い。クラスター分析ならびに数量化Ⅲ類による意識分析によると、登山に対して達成感、自然との接触及び人間同士のふれ合いを楽しむ「行楽意識」が強く、また景観に対する反応は即物的であるということがわかった。

次に、「仲間登山」の行動パターンは、主に中国地方在住のサラリーマンが、家族を伴わないで1泊のドライブを兼ねた登山旅行をするというものである。登山キャリアが高く、登山の計画性を楽しむ「計画意識」、山とはまったく無関係のことを考える「無関係意識」が強い。数量化Ⅲ類の結果では、景観と感想に結び付きがなく、心意的なイメージが卓越している。「仲間登山」は、『行楽登山』、『アルペンスポーツ登山』両方の性質を引き継いで発展してきたと考えられる。

このように大山登山タイプは2極分解が進んでいるが、全体としては「行楽意識」を持つ「家族登山」の勢いが強く、この状態が続くことによって大山における登山自体の性質が変化しようとしている。

さて、こうした大山にみられる登山の変遷は、日本全体の登山史と比較してみると、類似の傾向を示している。日本では、高山は古代から信仰の対象として崇められてきた。奈良時代には、修験という山岳宗教が存在し、山伏による信仰登山が日本の各地で行なわれた。近代登山が始まったのは、江戸幕府の権威が揺らぎ、日本の価値観が大きく転換した明治維新前後である。日本は開国とともに、近代的な学問、思想、そしてアルピニズムの精神まで輸入した。というのは、開国当時、ヨーロッパはアルプス登山最盛期だったからである。その後、日本でも、①より高い山の初登頂をめざす黄金時代、②困難なルートを開拓した銀の時代を迎え、ほどなく登山が大衆化した。²⁰⁾

アルペン登山の発端となったヨーロッパの事例をみると、ヨーロッパにおけるスポーツ登山は18世紀末モンブラン初登頂に始まった。それ以前の山岳地は恐怖の対象であり、¹⁰⁾ 自発的に登られる地点でなかった。しかし、自然科学の発展とともに、迷信を否定する学者や知識人がアルプス登山に勤しむようになる。このような黎明期を終え、ヨーロッパ登山は①4,000メートル級の山々が初登頂された黄金時代、②困難なルートを開拓した銀の時代、③ガイドレス登山、単独登山の発展、④登山の大衆化、という過程を経てきた。⁵⁾

このように、山岳地には、山にまつわる歴史があり、時代毎の登山パターンと特徴がある。そ

して、最終的に登山は家族の楽しみの行動として、より広い人々に普及している。高齢者の増加傾向もこの流れの中にある。さて、最後にこうした登山のあり方を自然公園におけるレクリエーションのあり方とからめて考察を加えておきたい。

大山登山は、元々一部の修験者のみに許された行事だった。その登山が、科学者及び探検家の研究手段となり、その後スポーツとして栄え、最後にあらゆる人々のレクリエーションとなってゆく過程と姿を探求してきた。昔は特殊だった登山も、現在は、老若男女あらゆる人物のコミュニケーションや自然回帰の場として生かされている。人は山を選んでも、山は人を選ばない。大山では、ヒマラヤ遠征に行く登山のベテランから、言葉もまもない幼児まで、各々自分のペースで登山をしていた。体力、経済力、立場の全く違う人間が、同じレクリエーション空間を利用しながら、個々に満足ゆく結果を得るわけで、実に素晴らしいことといえる。

ただし、誰でも登れるという利点から問題も生じている。山道を往復するのに行列ができ、都会と変わらぬ人混みが生じている。登山者の増加は、ゴミのポイ捨て、石を落とす子供、盗難等、モラルの低下を招いた。登山道が崩壊し始め、すべての人を受け入れていた山が、次はすべての人を拒否するかもしれない。過剰利用による混雑現象である。

いま、レクリエーションに求められるのはゆとりである。競争登山の時代は終わった。今後の大山登山は、人と人とが真に優しい気持ちで接しあい、大自然を共有するものでありたい。ぜひ、ゆっくりと静かに登るべきである。

謝 辞

聞き取り調査に協力して下さった、米子警察署・大山山岳防止協会・国立公園管理事務所の方々、足立修氏、金谷孝二氏、小西毅氏、清水谷登氏に、深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 油井正一：自然公園の教化施設に関する研究，千葉大学園芸学部学術報告40，pp. 45～53 (1987)
- 2) 赤木三郎：大山の地形・地質 大山探訪，中国新聞社，広島，pp. 126～130 (1991)
- 3) 大山国立公園協会：大山のアルバムー自然と歴史一，pp. 2～3, 74～80 (1986)
- 4) 五来重：山の宗教 修験道講義，角川書店，東京，pp. 199～206, 219～222 (1991)
- 5) 堀田弘司：山への挑戦，岩波書店，東京，pp. 2～42 (1990)
- 6) 環境庁：平成5年度環境白書（各論），大蔵省印刷局，東京，p. 228 (1993)
- 7) 小西毅：大山の自然保護，日本山岳会山陰支部創立四十周年記念誌，pp. 34～pp 47 (1989)
- 8) 小西毅：大山遭難史，日本山岳会山陰支部創立四十周年記念誌 (1989)
- 9) 毎日新聞社：大山，毎日新聞社，大阪，pp. 178～187 (1958)
- 10) 宮下啓三：山の宗教 山の心，ベースボール・マガジン社，東京，pp. 73～79 (1979)
- 11) 日本気象協会：山陰のくらしと気象の暦，松江・鳥取 (1980～1984)
- 12) 沼田頼輔：大山雑考，新日本海新聞社，鳥取，pp. 6～8, 21～26, 206 (1977)

- 13) 山陽新聞社：大山 その自然と歴史，岡山，pp. 150～152, 155 (1992)
- 14) 山陽新聞社：冬山遭難，岡山 (1981)
- 15) 品田穰：都市の人間環境，共立出版，東京，pp. 20～80 (1987)
- 16) 自然環境保全審議会：自然公園の利用のあり方について，国立公園475，pp. 8～20 (1989)
- 17) 自然公園保護・利用研究会：登山者の実態および事故 大山隠岐国立公園大山地区内における事故防止対策のための検討調査，pp. 20～26 (1983)
- 18) 鈴木岩弓：伯耆大山信仰－縁起に示された大山の靈威－日野川流域の民俗，pp. 290～295 (1990)
- 19) 田中正大：日本の自然公園，相模書房，東京，pp. 239～247 (1981)
- 20) 俵浩三：緑の文化史，北海道大学図書刊行会，札幌，pp. 175～184 (1991)
- 21) 鳥取県高体連登山部：大山頂上の清掃と自然保護について (1969～1971)
- 22) 鳥取県山岳協会：鳥取県山岳協会十周年記念誌，米子，pp. 50～62 (1976)
- 23) 鳥取新報社：鳥取新報，鳥取新報社，鳥取 (1937)
- 24) 渡辺修・大谷直史：現代日本人の自然認識 (I) 国立公園利用者の自然利用形態と意識，103回日林論，pp. 191～192 (1992)
- 25) 山崎安治：日本登山史，白水社，東京，pp. 189～491 (1986)